

ふ

ふ

輕唇音にして單子音の一つ。濁音にてぶとなり重濁音にてぶさなる時は重唇音に變ず。清音のふが詞の中音また末音に来る時は多く音便にうと發音するを常とす。

ふの濁音。

ふの重濁音。

ふ 麩(名)

食品の名。小麥の粉に製したるもの。觀世麩、花麩、燒麩、渦麩等あり。

ふ 譜(名)

「一」種々の符號を用ひて音樂の調子を記したるもの。●樂譜。「二」系譜。●系圖。

ふ 傳(名)

かしづき。●守り役。

ふ 臍(名)

腹中の機關。○「胃の臍」

ふ 賦(名)

漢文の一體。事實を叙述したる有韻の文。

ふ 符(名)

「一」合札。●切符。「二」札。「三」太政官の官令。「四」神佛の守札。

ふ 府(名)

●「一」役所。○「左近衛府」「國府」「幕府」「二」現今は行政區劃の名。四十餘縣に對して東京、京都、大坂の三府あり。

ふ 歩(名)

將棋の駒の名。歩兵に擬したるもの。

ふ 斑(名)

ぶちく。●班紋。●班點。

ふ 婦(名)

「一」女。●婦人。「二」妻。●嫁。

ふ 生(名)

草の生ふるところ。○「笹生」「苔生」「瓜生」

ふ (名)

「芝生」「蓬生」「淺茅生」「園生」

ふ 不(形)

節の略。○萬葉まを薦のふのみ近くて「打消の詞。○「不満足」「不束」

ふ 經。歷(他動下二段)

過ぐる。●過す。●經過する。

ふ 綜(他動下二段)

機を織る時縱絲を揃ふる。

ふ 武(名)

文の反對。兵衛。●軍事。●戰陣。

ふ 夫(名)

人夫。●役夫。

ふ 分(名)

「一」尺度の名。一寸を十に割りたるもの。「二」板などの厚み。○「分が厚い」「三」徳川時代の貨幣の名。一兩を四つに割りたるもの。「四」部分。●小分。

ふ 歩(名)

田畑山林などの面積を量る詞。六尺四方。…宅地にては坪といふ。

ふ 部(名)

「一」部分。「二」書物の一揃。

ふ 無(形)

打消の詞。○「無禮」「無任附」

ふ 不(形)

ふに同じ。○「不調法」「不風流」

ふ 布衣(名)

無位無官の人。●平民。

ふ 不意(名)

思ひ懸けぬ事。●意外。△(形)「不意

の。(副)―不意に。

ふい 無異(名) 異變の無き事。●無事。

ぶゐ 無爲(名) 爲す事のなき事。

ふいち^{ヤチ} 吹聴(名) 言ひ觸らす事。●披露。●ひ

るめ。△(動)―吹聴す。

ぶいく 撫育(名) 愛撫して養育する事。●愛育。△(動)

―撫育す。

ふいふいけ^{キコウ} 回教(名) マホメット教の一名。

ふいご 輔。吹革。吹子(名) ふいがうの轉。

ふいがう 輔。吹革(名) ふきがいの音傾。◎鍛冶屋の

具。狸の皮にて作り風を入れて火を吹き起

さしむるもの。●吹子。

ふいごむり 吹革祭(名) 鍛冶屋にて十一月八日に行

ふ祭。吹革の勢に謝するために之を行ふ。

ふう 風爐。風呂(名) 「一」茶の湯の具。形丸く火鉢に

似て一方より風を入るゝ様に造りたるも

の。「二」又之に似たる形のもの。「三」浴湯。

降るの轉。○萬葉東歌「伊香保の嶺るに

降る雪の」

ふうろう 浮浪(名) うかびさまふ事。●ぶら／＼して

ふらうふしのくすり 不老不死の藥(名) 人間一たび之

を飲めば其身老いもせず死にもせぬさいふ

仙藥。

ふらうもん 不老門(名) 唐の朝廷に有りし門の名。

ふうく 附録(名) 本文又は本紙に添へたる書面。

ふうく 風呂屋(名) 湯屋。●錢湯。

ふうしき 風呂敷(名) 物を包みて携ふる爲めの四角な

る切れ。

ふはい 腐敗(名) 腐る事。△(動)―腐敗す。

ぶばる 武張(自動四段) 武を以て威張る。●武勇らし

き様をなす。

ふはく 浮薄(名) 人の心のうき／＼して輕薄なる事。

△(形)―浮薄なる。(副)―浮薄に。

ふばこ 文箱(名) 文を入れて遣り取りする箱。

ふばさみ 文挾(名) ふみばさみの略。

ふにょい 不如意(名) 意の如くならざる事。●思ふ様に

ゆゝぬ事。●生活の困難なる事。△(形)―

不如意なる。(副)―不如意に。

ふにん 補任(名) 職に補し官に任ずる事。●任官○「公

卿補任」

赴任(名) 任地に赴く事。△(動)―赴任す。

ぶにん

無人(名) 人の少なき事。●人手の足らぬ事。

ふぼ

父母(名) らいはい。

ふほん

不犯(名) 男女の交接をせぬ事。(佛教)

ふほう

不法(名) 無法。●無理。●非道。△(形) 不法なる。(副) 不法に。

ふほごもり

(自動) 含み隠るの意。○紀「中つ枝のふほごもりあはれる少女」

ふへい

不平(名) 苦情ありて心の平らかならぬ事。●不満。●不安。

ふべん

不便(名) 便利ならぬ事。△(形) 不便なる。(副) 不便に。

ぶへん

武邊(名) 武道。●武事。

ぶど

餠餅(名) 上古の餅の名。油揚げしたるもの。

ぶど

浮屠。浮圖(名) 「一」佛。●佛法。「二」塔。

ぶど

(副) 「一」ふいさ。●ついちうさ。●直に。「二」はからず。●不意に。

ぶどろ

太蘭(名) 草の名。蘭の一種にして蘭庭の材料となるもの。

ふどぼら

太腹(名) 馬などの腹の太きところ。

ふどぼし

太箸(名) 一月三箇日の膳部に用ふる祝の箸。●祝ひ箸。

ふどどき

不届(名) 「一」不行届。●不注意。「二」不埒。●不法。

ふどり

太織(名) ふさおりの略。

ふざり

(名) 肥満。

ふどろ

太(自動四段) 太くなる。●肥ゆる。●肥満する。

ふどを

太緒(名) 筥の糸の名。一の緒より五の緒までの稱。

ふどおり

太織(名) 絹織物の一種。太き絲にて織りたるもの。

ふどたまぐし

太玉串(名) 玉串の美稱。

ふどん

蒲團(名) 「一」蒲の葉にて丸く組みたる敷物。●圓座。「二」聲、夜着等の總稱。

ふどむぎ

太麥(名) 大麥に同じ。

ふたう

不當(名) 不適當。●不都合。●無禮。△(形) 不當なる。(又) 不當の。

ふどろ

不動(名) 五大明王の一つ。身に火焰を背負ひて右手に降魔の劔を持ち左手に纏の繩を持ち。外面忿怒の相を現じて一切の魔軍を降伏するもの。●不動明王。●大聖不動明王。

●不動尊。

ふどう

不同(名) 同じからぬ事。●不揃。

ふたふ

舞踏(名) 「一」舞ひ踊る事。「二」拜謝また祝賀の意を表する時。天皇の御前にて行ふ古代の敬禮法。拾芥抄に曰く。舞踏事。再拜置立左右左居左右左取笏立再拜。さあり。左右左さは足を左足右足左足さ使用事。「三」西洋式の一種の踊。●ダンシング。

ぶたう

葡萄(名) 「一」木の名。蔓生にして秋の頃小粒紫色の實熟するもの。實は食用とし又葡萄酒に作る。「二」染色の名。紫の一種。

ぶだう

武道(名) 武藝の道。●武士の道。

無道(名) 道理にはづれたる事。●道の行に反したる事。△(形)―無道なる。(又)―無道

ふどうそん

不動尊(名) 不動を見よ。

ぶたうねすみ

葡萄鼠(名) 染色の名。鼠を帯びたる葡萄色。

ふどうさん

不動産(名) 法律上の詞。他に動かし移されぬ財産。地面家作等をいふ。……動産に對して。

ふどうみ

不動明王(名)

不動を見よ。

ぶたうし

葡萄酒(名) 西洋酒の一種。葡萄より製したるもの。

ふどの

文殿(名) 文庫。●書物庫。●書籍箱。(雅)

ふどのりやう

太祝詞言(名) 祝詞の美稱。(祝詞式)

ぶどくらく

武徳樂(名) 雅樂の曲名。

ぶどまに

太卜(名) 上古虞の肩骨を燒きてしたる占。神慮など何ふ時に行ひしもの。後世は龜の甲を代用す。

ぶだま

太前(名) 神前または貴人の前。●廣前。

ふどろ

懷(名) 「一」胸にて衣類の上前と下前と合ひたる處の内側。「二」山にて圍まれたるさ

ふどろ

文所(名) 學問所。(空穗)

ふどろがみ

懷紙(名) 懷に入れて携ふる紙。●疊紙。

ふどろて

懷手(名) 手を懷に入る事。

ふどろすみ

懷住(名) 世界知らずに父母の膝下にか住む事。(空穗)

ふどろ

風土記(名) 諸國の地理風俗など記したる書物。

ふどろめ

施(名) 太織に同じ。

ふとし

太(形。形狀言ク活) 大きな。●肥えて居る。

ふとし

種(名) ふんごしの畧。

ふとしる

太知(他動四段) すべてふとしくに同じ。○

萬葉「宮柱ふとしり立て」

ふとしかす

太敷(他動四段) ふとしくの敬語。○萬葉

「ふとしかす都を置きて」

ふとしく

太敷(他動四段) 「一」ふとしきたつに同じ。

「二」宮殿を立つる。●都を占むる。「三」天

下を治むる。……(古)

ふとしきたつ

太敷立(他動下二段) 柱を太く作りて立

つる。●宮殿を立つる。○祝詞式「下つ磐

根に宮柱ふとしきたて」

ふともの

太物(名) 吳服。●反物。

ふともも

太股(名) 内股の太き所。

ふち

淵(名) 川水の深く集まりたる所。……瀬の反對。

ふち

縁(名) へり。●端。●側。

ふち

斑(名) ふちに同じ。

ふち

扶持(名) 「一」助け救ふ事。●衣食を給與する事。

△(動)―扶持す。「二」徳川時代。士卒の扶

ふち

持として與へたる米。祿の少なきもの。

「一」草の名。蔓生にして夏の初め紫白の

の花咲くもの。「二」染色の名。藤の花の色

ふち

不治(名) 病の到底癒ゆべからざる事。△(形)―

不治の。

ふち

(名) 鞭に同じ。

ふち

斑(名) まだら。●班紋。●斑點。

ふちばかま

藤袴(名) 「一」草の名。秋の七草の一

つ。花は形女郎花に似て薄紫の色に咲き香

氣殊に高きもの。「二」蘭の一名。

ふち

府廳(名) 府の事務を執る役所。

ふち

符帳(名) 隠語にて附けたる目印。多く商

家などにて用ふるもの。

ふて

不調(名) まいのほね事。

ふち

不定(名) 「一」定まりの無き事。●變化

し易き事。「二」不思議。●意外。○宇治不

定の事かな」

ふて

不調法(名) 不束。●過失。

ふちだな

藤棚(名) 藤を纏はする爲めに設くる棚。

ふちつぼ

藤壺(名) 禁中六舎の一つ。飛香舎の一名。

ふちな

藤菜(名) 蒲公英の古名。(和名抄)

ふちなみ

藤波(名) 藤の花。◎藤並の意なりとも。又

波に見立てたる詞なりともいへり。○古今「我宿の池の藤波咲きにけり過ぎがてにのみ人の見らん」

ふちん

浮沈(名) 浮も事と沈も事と。●人世の盛衰。

ふちふち

藤生野(名) 催馬樂の曲名。

ふちくらさうり

藤倉草履(名) 草履の一種。蘭にて編

みたるもの。

ふちまめ

藤豆(名) 草の名。豆の一種にして藤に纏た

る紅白の花さき實は食用となるもの。

ふちこま

斑駒(名) 毛のまだらなる馬。○記「天のふ

ちこま」

ふぢごころも

藤衣(名) 「一」葛布などにて織りたる粗造

の衣。古へ賤民の着せしもの。○萬葉「須

磨の海士の鹽焼衣の藤衣まこほにしあれば

いまだ着なれず」(二)喪服。◎上古には葛

布などに織りたるものを用ひし故の名。○

千載「志ふかく染めてし藤衣きつる日數の

淺くもあるかな」

ふちゅう

府中(名) 國府のある場所。●府内。●府下。

ふちゅう

不忠(名) 忠義ならぬ事。

ふり

振(名) 顔付。●様子。●姿。●風。

ぶり

鰯(名) 魚の名。背青黒く腹白く鱗細く身大なる

もの。

ふりつづ

振出(自動下二段) 「一」聲を上ぐる。○源氏

「鈴虫のふりいでたるなぞ」(二)紅の染色を

水に振り出す。(三)人を見捨てて立ち出づ

る。○源氏「かゝる空にふりいでんも人め

いさほしう」

ふりはへ

(副) ふりはへてに同じ。(雅)

ふりはへたまふ

(自動四段) わざく訪はせ給ふ。

○空穗「かくふりはへたまへるに如何で隠

れん」

ふりはへつ

(副) ふりはへてに同じ。(更科)

ふりはへて

(副) わざく。●殊更に。(雅)

ふりおこす

振起(他動四段) ふるひおこす。●振起す

る。○萬葉「大丈夫の心ふりおこし」

ふりわけ

振分(名) 振分髪(名) 左右に振り分けて垂らした

ふりわけがみ

る髪。古へ男女共に童のせし事。……婚姻

すれば上げて一つに結ぶなり。

(形。形狀言々活) ふるびかゆる。●昔にか

ふりがたし

はらぬ。○源氏「ふりがたう清けなる御形」

ふりがな

振假名(名) 漢字の傍に假名にて其讀方を記す事。●傍訓。

ふりがへる

振反(自動四段) 跡を振り向く。●顧みる。

ふりょ

不慮(名) 不意。●意外。

ふれりゅう

無聊(名) 徒然。△(形)―無聊なる。(又)―無聊の。(副)―無聊に。

ふりだし

振出(名) 「一」振り出す事。又は其物。「二」熱湯にて振り出して飲む煎薬。風薬に用ふ。

ふりだす

振出(他動四段) 「一」水の中に物を振り動かして其中の液を出でさせる。「二」爲替手形

ふりそで

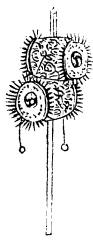
振袖(名) 普通の丈よりも長き袖の小袖。徳川時代元服以前の男女の着用せしもの。

ふりつづみ

鼗鼓。振鼓(名) 「一」舞樂の具。小さき鼓を二つ或は三つ重

ねて之を柄につらぬき其柄の端を持ちて振りつ

舞ふもの。(圖) 「二」小兒玩弄物の名。舞



樂の鼗鼓に似せて作りたるもの。

ふりつき

葉鐵(名) 蘭語。◎鐵の薄板に錫を塗りて錆を止めたるもの。

ふりむく

振向(自動四段) 頭をめぐらして其方に向く。

ふりむく

振向(他動下二段) 振り向かする。

ふりやぐ

武略(名) 武事の謀略。●軍略。●兵略。

ふりこむ

降籠(他動下二段) 雨雪などの降りて人の他行をさむる。

ふりさく

(自動下二段) 遠ざかる。●遠く仰ぐ。○萬葉「ふりさけて三日月みれば一目みし人のまよびさ思はゆるかも」

ふりさけあふぐ

(他動四段) ふりさけみるに同じ。○新續古今「春日山ふりさけあふぐ言の葉の昔の跡を猶たのみつゝ」

ふりさけみる

(他動一段) 遠ざかりて見る。●遠くながむる。●高く仰ぎ見る。○堀川「天の原雲井にあそぶ眞名鶴をふりさけみれば歸へぬべし」

ふりきる

振切(他動四段) 振り離す。

ふりりゅう

風流(名) 「一」ふうりゅうに同じ。△(形)―ふ

ふりしく

りうなる。(又)一ふりうの。(副)一ふりうに。(二) 祭禮などの時いろ／＼の成立して行列に立ち出づる事。(三) 能楽の翁三番叟の後にする舞の名。鵜龜風流。松竹風流。大黒風流など數種あり。

降敷(自動四段)

「一」降り類る。○好忠集風

さわぎ霞ふりしき寒き夜に何をあかす結ぶ水子「二」物を敷きたるやうに降り埋む。○玉葉「雲となり雪さふりしく山櫻いつれな花の色さかも見ん」

ふりしきる

降類(自動四段) 類に降る。

ふりせす

(自動・特狀) ふるくならぬ。●もそのまゝである。(雅)

ふりすつ

振捨(他動下二段) 振り放して捨て置く。

ふる

降(自動四段)

空より物の落ち來る。

ふる

振(他動四段)

「一」手に持ちて動かす。●手先をあちこちへ動かす。●蒔き散らす。「二」神輿を振りに擔ぐ事。「三」神輿を振るの意より出で。○神社を遷し建つる。○大鏡「三笠山にふり奉りて春日大明神と名つく」

ふる

震(自動四段)

震ひ動く。●震動する。

ふる

觸(自動下二段)

さばる。

ふる

觸(他動下二段)

告げ知らする。●布告する。

ふる

舊(自動上二段)

ふるくなる。●ふるびる。

ふる

古。故。舊(形)

ふるき。●もその。●むかし。の。

ふるひ

篩(名)

具。炭類を振ひて糠を漉し除きながら道

ふるひ

震(名)

ふるふ事。

ふる

部類(名)

類によりて分けたる其部門。

ふる

古本(名)

古き書物。

ふる

佳(名)

漢字の雞雉等の右の部分。

ふる

古道具(名)

古くなりたる道具。賣買する時にいふ。

ふる

舊年(名)

去年。●昨年。

ふる

舊川(名)

古代歌曲の名。

ふる

籥(他動四段)

籥に掛くる。

ふる

振(他動四段)

振るに同じ。

ふる

震。振(自動四段)

「一」振られて動く。●震動する。「二」わななく。●戦慄する。「三」(奮)

心の勇む。●奮激する。●奮發する。

ふる

古歌(名)

古人の歌。●こ。こ。

ふる

古草(名)

去年生じたる草。

ふるくさし

古臭(形。形狀言ク活)

いかにも古き有様。

ふるや

古屋(名)

古き家。

ふるまひ

振舞(名)

「一」其人の爲す事。●所業。●舉動。●行爲。●二舞應。●馳走。

ふるまふ

振舞(他動四段)

響應する。

ふるまふ

振舞(自動四段)

「一」行ふ。●爲す。●二威儀を正す。

ふるぶ

古(自動上二段)

古くなる。

ふるぶ

(副)

身内の震ひ慄く有様。●わななく。●戦々。

ふるぶる

古々(形。形狀言シク活)

ふるめかしに同じ。(枕)

ふるぶるし

古言(名)

昔の言葉。●古人の言語。

ふるぶる

故事(名)

こじ。●昔ありたる事跡。

ふるぶる

古手(名)

古着に同じ。

ふるぶる

故郷(名)

「一」昔し都の有りたる地。●昔し人家ありて今は荒れ果てたる地。●二我生れたる土地。●我家のある土地。……旅に

ふるぶる

ていふ。●三以前に我住みたる土地。……

ふるぶる

轉住せし後にいふ。

ふるぶる

黒貂(名)

獸の名。貂の一種に黒色なるもの。

ふるく

ふるく

ふるく

ふるぎ

古着(名)

着ふるしの衣服。賣買する時にいふ。

ふるめかし

(形。形狀言シク活)

古物らし。

ふるめく

(自動四段)

古物らしくなる。●古びる。

ふるし

古。舊(形。形狀言ク活)

時の立つて居る。●昔のものである。

ふるびと

古人(名)

古くなりたる人。●老人。(雅)

ふるもの

古者(名)

ふるびとに同じ。(源氏)

ふるす

古巢(名)

鳥の以前に住みたる巢。

ふるす

舊(他動四段)

ふるくする。

ふるわ

不利(名)

平和を缺く事。●中違ひ。

ふはりど

(副)

柔き物のかぶまり懸かりたる有様。

ふわわ

膾分(名)

解剖。

ふはふは

(副)

雲の浮びたる如き有様。●(又)―ふは―こ。

ふか

鱧(名)

魚の名。大洋に住む大魚にして時により漁船などに害をなし又は人を呑むもの。

ふか

府下(名)

府の管轄内。

ふか

不可(名)

よくあらぬ事。●不承知。△(形)―不可なる。

ぶか

部下(名)

手下の者。●組下。

ぶか

部下(名)

手下の者。●組下。

ふが 舞歌(名) 歌舞に同じ。(謡曲)

ふかゐ 深井(名) 能面の名。やゝ年ふけたる女に用ふるもの。

ふがひやし (形。形状言ク活) かひなし。●役に立たぬ。●いくちのない。

ふかそぎ (名) 小兒五歳の時。生ね揃ひたる髪を先を少し剪み切る祝。

ふかん 不堪(名) 藝能の堪能ならぬ事。●下手。

ふかむ 深(他動下二段) 深くする。

ふかんでんそう 不堪田奏(名) 諸國の豊凶を目録にして奏上する事。之を穀覽ありて租税の三分一なご免し給ひし事の古はありしなり。(年中行事歌合)

ふかく 不覺(名) 「(一)物を覺ぬざる事。●前後忘却。

△(形)―不覺なる。(又)―不覺の。○盛衰

「清水の冠者こそは東西不覺の者にて候」

(副)―不覺に。(二)うっかりして居る事。

●覺悟のわるき事。●心得のわるき事。●

油斷。△(形)―不覺なる。(又)―不覺の。

○宇治「わ雜色は不覺のやつかな御車をかく

召しの候ふはと我にひてこそ貸し申さ

ふかく

ふかく

不學(名) 無學。

舞樂(名)

舞の入

りたる

雅樂。

(圖)

ふかぐつ

深沓(名)

(一)靴

の沓の

一名。

(二)藁

にて深く作りたる履。雪國

にて用ふるもの。(圖)

深手(名) 深き手傳。●重傷。

深み(名) 深き處。

深緑(名) 色の名。綠色の濃きもの。

深見草(名) 牡丹の異名。

深(形。形状言ク活) 淺からぬ。●端に遠き。●

始に遠ざかりたる。

不可思議(名) 不思議に同じ。△(動)―不可



思議なる。(又)―不可思議の。(副)―不可思議に。

更(他動四段) 更けしむる。

(他動四段) 食品を湯氣にて蒸す。

不豫(名) 天皇の御病氣。

蚋(名) 虫の名。草原などに多く居る小虫にて人の血を吸ふもの。

芙蓉(名) 「二」蓮の一名。「二」木芙蓉に同じ。

不用(名) 「二」入用ならぬ事。「二」無益。●無用。……△(形)―不用なる。(又)―無用の。

(副)―無用に。

武勇(名) 武く勇ましき事。●雄々しき事。

蓋(名) 物の口を塞ぎ被ふ物。

二(數) 二つ。●に

札(名) 「二」文字を書き記す板。又は小切の紙。

(二)守り札。

豚(名) 家畜の名。形猪に似て牙小さく。體肥大にして性鈍きもの。肉は脂肪多く味美なり。

譜代(名) 「二」代々の家臣。「二」徳川時代大名の格式。譜代の家臣にして一萬石以上。即ち大名なるものの稱。

舞臺(名) 「二」舞樂を演ずるところ。「二」能樂を演ずるところ。「三」芝居を演ずるところ。

ふたいでこ 二徒弟(名) 徒弟の子。又父母の徒弟。

ふたば 二葉(名) 「二」双子葉植物の芽生。「二」總べて草木の芽生。「三」二葉葵の略。

ふたばぐさ 二葉葵(名) 二葉葵に同じ。

ふたばあふひ 二葉葵(名) 草の名。加茂祭に用ふる葵の一種。

ふたごころどう 二所藤(名) 二箇所に藤を卷きたる弓。

ふたり 二人(名) にいん。●兩人

ふたがる (自動四段) ふさがるに同じ。

ふたたび 再(副) 二度。●かされて。●又。

ふたたびす 再(他動サ變) 二度繰り返す。

ふたつ 布達(名) 官令。●布告。●御觸。

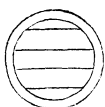
ふたつ 二(數) 一に一を加へたる數。●に。

ふたつどもゑ 二匹(名) 紋の名。玉の二つある巴。

ふたつぎぬ 二衣(名) 二枚重ねて着たる衣服。

ふたつびき 二引(名) 紋の名。丸に二の字を引きたる形。(圖)

補陀落(名) ふだらくせんと同



じ。

ふたらくせん

補陀落山(名) 想像の島の名。観音菩薩の宮殿のあるさいふ處。(佛教)

ふたん

負擔(名) 負ひ擔ふ事。●身に引き受くる事。

●擔當。●擔任。△(動)―負擔す。

ふたん

不斷(名) 「一」間斷なき事。△(形)―不斷の。

○「不斷の御讀經」「不斷の念佛」「二」平生。

●日夜。

ふたんぎ

不斷着(名) 平生の着物。……晴着に對して

いふ。●平服。

ふたのつじ

札の辻(名) 高札場のある衢。

ふたぐ

(他動四段。又下二段) ふさぐに同じ。

ふたまた

二朕(名) 二つに分れたる朕。

ふたまただいこん

二朕大根(名) 野菜の名。二朕のあら大根。

(副) 羽など動す音。●ばた／。(又)―

ふたふた

ふた／＼と。

ふたて

二子(名) 「一」二筋つゝ縫ひ合はせたる縁。

「二」二子の糸にて織りたるもの。

ふたて

二子(名) 二人同時に生れたる兒。

ふたごころ

二心(名) 「一」兩方に赴く心。「二」二君に

仕ふる心。●不忠の心。●謀反心。

ふたごもり

二籠(名) 同じ籠に奎の二つ籠る事。(後撰)

ふたへ

二重(名) 「一」二つ重なる事。●にちゅう。〔二〕

老いて腰の風みたる事。

ふたへおりのもの

二重織物(名) 綾織物の上に綾物をしたるもの。

ふたへかりぎぬ

二重狩衣(名) 表裏同じ色の狩狩衣。

ふたあわ

二藍(名) 染色の名。紫の種類。赤花と青花とにて染めたるもの。

ふたゆく

二行(自動四段) 二方に行く。●兩様に進む。

○萬葉「空蟬の代やも二行く何すまか妹に逢はす我戀ひ居らむ」

ふため

二目(名) 二度見る事。

ふため

不爲(名) 爲めにならぬ事。●不利益。

ふためく

(自動四段) ばた／＼音をさする。●羽ばた

ふためく

さする。●あわつる。

ふたし

札所(名) 回國順禮の參詣して札を受くべき三

十三番の觀音堂。

ふたしへ

(名) 二方。●二重。○伊勢集「いかでかく

心一つをふたしへにうくもつらくもなし

見すらん」

ふたもの

蓋物(名) 食器の名。蓋ある鉢。

ふれ

觸(名) 觸れ知らずる事。又は其文書。●布令。

●告示。●布告。●布達。

ふれい

布令(名) 布告。●布達。

ふれい

不例(名) 病氣の敬語。●御不快。……最も御の字を冠らせて用ふるを常とす。

ふれい

無禮(名) 禮儀を失ふ事。●缺禮。●失禮。△(形)―無禮なる(副)―無禮に。

ふればはす

(他動下二段) 觸れしむる。●馴れ親まする。○源氏「かの御あたりになればいせんになどか覺えの劣るらん」

ふればはす

(自動四段) 觸るい。●さばる。○源氏「香のかをりにふれば給へる御けはひにやこいと思ひやりめでたく」

ふれがき

觸書(名) 布達書。

ふれがしら

觸頭(名) 徳川時代。江戸市中に布告するの事を掌る役。

ふれながし

觸流(名) 觸頭の指揮を受けて觸の趣を順々に傳達する役。

ふれん

不廉(名) 價の安からぬ事。●高價。

ふれした

觸下(名) 觸頭の下役。

ふそ

父祖(名) 父と先祖と。

ふさう

扶桑(名) 我日本の異名。

ふそく

不足(名) 足らざる事。△(形)―不足なる。(又)―不足の。

ふぞく

附屬(名) 「二」附き従ふ事。△(動)―附屬す。

ふぞく

風俗(名) 風俗歌。……ふうぞくを見よ。

ふつ

佛(名) 佛蘭西。

ぶつ

佛(名) 「一」ほとけ。●佛陀「二」佛教。●佛法。

●佛道。

ぶつ

(他動四段) 打つ。(俗)

ふつ

(他動下二段) 捨つに同じ。○大和「此水あつ湯になざりねれば湯ふてつ。又水を入る」

ふつに

(副) 全く。●悉く。●すべて。(紀)

ぶつにち

佛日(名) 釋迦の在世を太陽の天に在るに喩へていふ。○謡曲「佛日西天の雲にかくれ」

ぶつぽふ

佛法(名) 佛教。●佛道。

ふつぽふ

佛法(名) 「二」佛と法と僧と。●三寶

「二」鳥の名。形鳩に似て深山に住み。アツボウソウといふ如き聲して鳴くもの。○新

ふつど

(副)

六帖「松の尾の望しづかなる曙に仰きて聞けば佛法僧なく」

少しも。●急には。○枕「げにいさあはれさは聞きながら涙のふつさ出でこぬ。いさばしたなし」

ふつど

(副)

「一」ふつさに同じ。「二」ふさに同じ。

ふつどう

沸騰(名)

流動體の煮え立つ事。△(動)―沸騰す。

ふつたう

沸湯(名)

煮え立ちたる湯。

ふつたう

佛道(名)

釋迦の教へし道。●佛教。●佛法。

ふつり

物理(名)

物理學の略。

ふつりがく

物理學(名)

科學の名。物體の現象及び其變形の原因規律を研究するもの。

ふつりき

佛力(名)

佛の力。●法力。

ふつか

二日(名)

「一」二晝夜。「二」月の第二日。

ふつか

物價(名)

物の價。●相場。

ふつかく

佛閣(名)

佛法上の建物。●寺。●御堂。

ふつかあひ

二日宿醉(名)

前夜の酔の翌日まで醒めぬ事。

ぶつた

佛陀(名)

ぶつたに同じ。

ぶつた

佛陀(名)

佛に同じ。

ぶつたん

佛壇(名)

佛像を安置する棚。●持佛堂。

ぶつちう

物騷

世の中の物騷がしき事。(形)―物騷なる。(又)―物騷の。(副)―物騷に。

ぶつさう

佛葬(名)

佛道の葬式。

ぶつそくせき

佛足石(名)

釋迦の足跡を彫りたる石。…我國にては大和の藥師寺などにあり。

ふつど

(副)

きつと。●たしかに。●斷然。○謠曲「ふつと罷り歸るまじく候」

ふつつか

不束

「一」太く見苦しき有様。△(形)―ふつつかなる。(副)―ふつつかに。○空穗「いと大きやかにふつつかに肥え給へるがし」

ふつう

普通(名)

善く通ずる事。●世間並み。●通常。△(形)―ふつつかなる。(副)―ふつつかに。

ふつう

不通(名)

通ぜぬ事。

ふつう

佛供(名)

ぶつぐに同じ。

ぶつぐ

佛供(名)

佛の供物。

ぶつぐ

(副)

ふつぐらに同じ。(又)―ふつぐらと。

ぶつぐ

佛果(名)

成佛の結果を得る事。●佛となりおほせる事。●極樂に至る事。

ぶつぐ

(副)

張れたる有様。△(又)―ふつぐらと。

ぶつぐ

悲(自動四段)

憤る。●怒る。(紀)

ふつぐ

悲(自動四段)

憤る。●怒る。(紀)

ふつぐ

悲(自動四段)

憤る。●怒る。(紀)

ふつくゑ

文机(名) 本讀み字書きなどする机。……食

器を載する机に對していふ。

ぶつまつ

佛間(名) 佛壇のある室。

ぶつけ

佛家(名) 佛法に従事する人。又は其家。●僧家。

ぶつけい

物語(名) 神佛に詣づる事。●ものまうて。

ぶつづ

(副) 「一」物の煮え立つ音。「二」口に小言を

いふ聲。

ぶつこ

物故(名) 死亡。△(動)―物故す。

ぶつご

佛骨(名) 舍利に同じ。

ぶつが

不都合(名) 「一」都合のよからぬ事。「二」

不埒。●不届。●不法。

ぶつこう

佛工(名) 佛像を造る人。●佛師。

ぶつあ

文杖(名) 佛像に同じ。

ぶつてい

拂底(名) 商品の供給不足なる事。△(形)―拂

底なる。(副)―拂底に。

ぶつてん

佛天(名) 佛と天と。●佛菩薩と諸天と。

ぶつさん

物産(名) 産物に同じ。

ぶつさん

物參(名) 寺參り。●墓參り。

ぶつちやんばお

(名) 脊縫の裾の處を裂き明けたる男羽

織。昔し武士の着用せしもの。

ふうき

富貴(名) ふうきに同じ。

ふつき

文月(名) ふみづきの略。

ぶつき

佛器(名) 佛に供ふる器具。

ぶつぎ

物議(名) 世間の評判。

ぶつけ

佛教(名) 釋迦の立てたる教。●佛法。●

佛道。

ふつけ

拂曉(名) 夜の明け際。

ふつきぐさ

富貴草(名) 牡丹の異名。

ぶつみやう

佛名(名) 「一」佛の名號。……南無阿彌

陀佛と唱ふる事。「二」昔し禁中清涼殿に於

て。十二月十九日より廿一日まで三日の間

三世諸佛の名號を唱へて罪障を懺悔せしめ

給ひし公事。

ぶつし

佛師(名) 佛像を造る人。●佛工。

ぶつじ

佛事(名) 佛の祭。●供養。●法事。●法會。

ぶつし

佛書(名) 佛教の書物。●經文。

ぶつし

佛所(名) 佛の國。●極樂世界。(佛教)

ぶつし

佛性(名) 佛と成るべき性質。●佛たる

の資格。

ぶつし

佛生會(名) 四月八日に行ふ釋迦の降

誕祭。●灌佛會。

ぶつじん

佛神(名) 佛と神と。

ぶっしり

佛舍利(名) 舍利に同じ。

ぶつもん

佛門(名) 佛道に入る事を門に入るに喩へて

云ふ。

ぶっせき

佛跡(名) 「一」釋迦の遺跡。「二」佛の靈驗あり

たる土地

ふね

船。舟(名) 「一」人又は物を載せて海川を渡るも

の。「二」桶盪の類。○「湯ぶね」「馬ぶね」

ぶねん

無念(名) 思ひの到らざる事。●不行届。

ふねのたちあひひ

船立合(名) 能樂中の一種。徳川時

代祝言の式に用ひたるもの。

ふな

鰯(名) 川魚の名。形鰯または鯉に似て平たく味

淡きもの。

ぶな

山毛櫸(名) 木の名。櫸に似て菱形の實を結ぶも

の。

ふないた

船板(名) 「一」船中の敷板。「二」船に造るべ

き板。又は船に用ひたる板。○「船板の塀」

ふないくも

船軍(名) 「一」船にてする合戦。「二」船に

て出づる軍勢。●船手。

ふなば

船場(名) 船着の場所。

ふなばた

舷(名) 船の兩縁。

ふなばし

船橋(名) 橋の一種。橋杭を用ひず船を列ね

ふなごどめ

て。其上に板を渡したるもの。

ふなち

船留(名) 船を湊に泊する事。(新千載)

ふなおろし

船路(名) 船に乗りて行く道。●航海線路。

ふなをさ

船卸(名) 新たに造りたる船を初めて水に

ふなわたし

浮ぶる事。●新造船。●進水式。

ふながかり

船長(名) 船頭。●船長。

ふながかり

舟渡(名) 「一」舟にて渡す事。「二」船にて

ふなかり

の渡し場。

ふなかり

船繫(名) 「一」碇泊。「二」船繫りの場所。

ふなかり

●碇泊所。●港。●湊。

ふなかく

船方(名) 船の乗組人。●舟子。●船頭。●

ふなよばひ

水夫。●海員。

ふなよどめ

船樂(名) 船にて奏する雅樂。(紫日記)

ふなよそひ

船呼(名) 渡場にて客の船呼ぶ事。(雅)

ふなたな

船淀(名) 船の出帆を躊躇する事。

ふなたな

舟装(名) 出船の準備。

ふなたな

船棚(名) 和船の兩側に檣の如く附けたる

ふなたま

板。

ふなだま

船靈(名) 船にて船子の祭る神。住吉明神。

ふなれ

不馴(名) 船にて船子の祭る神。住吉明神。

ふなぞこ

まだ馴れぬ事。●未熟。

ふなぞこ

船底(名) 「一」船の底。「二」船底の形したる

もの。○「船底の枕」

ふなつき

船着(名) 船の着きて泊る場所。●湊。

ふなん

扶南(名) 雅樂の曲名。

ぶなん

無難(名) 「一」災難の無き事。●無事。「二」非難すべき點の無き事。●無疵。……△(形)

―無難なる。(又)―無難の(副)―無難に。

ふなむし

船虫(名) 虫の名。形草鞋虫に似て大きく色黒く船に多く住むもの。

ふなうた

船歌(名) 舟子の謠ふ歌。

ふなのへ

船舳(名) 船の舳先。

ふなのり

船乗(名) 船に乗るを業とする人。●海員。

●船頭。●水犬。

ふなぐら

船藏(名) 船を入れ置く建物。

ふなや

舟屋(名) 船藏に同じ。(空穂)

ふなやど

船宿(名) 「一」船客および船の荷物を取扱ふ宿。「二」遊船の世話をする宿。

ふなやかた

船屋形(名) 船の屋根。

ふなやもひ

船病(名) 船に酔ふ事。(和名抄)

ふなまごひ

船惑(名) 舟にて路に迷ふ事。○是則集いづかた泊なららん山風の拂ふ由路に舟まごひして」

ふなこ

舟子(名) 船にて働らく人。●水手。●水夫。

ふなごく^{クナ}

船御光(名) 佛像の背に附くる船形の光明。(圖)

ふなまひ

船酔(名) 船に酔ふ事。

ふなて

船手(名) 「一」船にて出づる軍勢。●舟師。「二」官船の船乗。又は其役人。「三」船路。「四」浦邊。●海手

ふなで

船出(名) 船を出た事。●出船。

ふなあし

船脚(名) 「一」船の水の中に入りてある部分。「二」船の進む速力。

ふなき

船木(名) 船に作るべき材木。●船材。

ふなきみ

船君(名) 船中乗合の主君たる人。

ふなゆ

(名) 船の中に漏れ入る水。●あか。(和名抄)

ふない^{うれい}

船幽靈(名) 海上にて死亡せし人の亡魂。船に乗りたる姿に現はるゝといふ。

ふなゆさん

船遊山(名) 舟遊び。

ふなみち

船道(名) 船路に同じ。

ふなじるし

船印(名) 船に立つる目印。旗の類。

ふなびと

舟人(名) 船乗。●海員。●水手。

ふなもよひ

(名) 出船の支度。(雅)

ぶらい

無頼(名) 無職業にてたよりさきもなく徒に遊



ふらち

び居る事。
不埒(名) 不屈。●不都合。△(形)―不埒なる。

ふらり

(副) ふら／＼に同じ。

ふらつく

(自動四段) ふら／＼と出掛くる。

ふらんねる

(名) 英語。◎毛織物の名。地薄くして上品なるもの。

ふらんと

(名) 遊戲の名。高所より下げたる二筋の繩の端に横木を渡し之に乗りて身を前後に動かすもの。

ふらんでい

(名) 英語。◎洋酒の名。酒精分の十分強きもの。

ぶらく

部落(名) 人家の集まりたる所。●村落。

ぶらぶら

(副) あち／＼と振られあるくやうの有様。(又)―ふら／＼と。

ぶらぶら

(副) 物の空中に釣り下げられたるやうの有様。●いづこもなく散歩などする有様。(又)―ふら／＼と。

ふらす

觸(他動四段) 觸れ示す。●世に告げ廣むる。踏(他動四段) 「一」足にて壓す。●足の下にする。

ふむ

ふん

糞(名) 大便

ふん

粉(名) 「一」金粉。又は銀粉。「二」白粉。「三」秤目又は舊貨幣にいふ詞。厘の十倍。

ふん

分(名) 分の十分の一。「二」角度にいふ詞。秒の六十倍。度の六十分の一。「三」時間にいふ詞。秒の六十倍。時の六十分の一。

ぶん

文(名) 「一」武の反對。文學。●學術。「二」文章。分(名) 「一」分前。●割前。「二」程度。●分量。●適度。「三」身分。●役目。

ぶん

文位(名) 位階。一位二位の類。……武功に賜ふ勲位に對して。

ふん

芽圍氣(名) 科學上の詞。地球を包む一種の氣體。大氣。●空氣。

ぶん

分派(名) 小きき分れ。●枝葉。

ぶん

分配(名) 分ち配る事。●配分。△(動)―分配す。

ふん

踏張(他動四段) 力を入れて踏みつくる。●踏はたかる。○「錠ふんばり」

ふん

奮發(名) 心を奮ひ發す事。△(動)―奮發す。

ふんばさみ

(名) 文挾に同じ。
墳墓(名) 墓に同じ。

ふんぼ

文法(名) 文章を正しく書く事を教ふる術。

ふんば

文房具(名) 書齋の器具。机、硯、筆立、文鎮の類。

ぶんぼく

文墨(名) 文筆に同じ。
分別(名) 道理を分けて考ふる事。●思慮。

ぶんべつ

△(動)―分別す。
分婉(名) 子を生む事。●出産。△(動)―分婉す。

ぶんべん

怒(名) 怒る事。●激怒。
分捕(名) 分捕る事。●分捕りたる物。

ぶんど

分捕(他動四段) 勝軍の時。敵地に侵入して兵器彈藥其他のものを奪ひ取る事。

ぶんどり

(名) 分銅に同じ。
分銅(名) 「一」懸目の輕重を見るため秤器の一方へ載せ加ふる金屬の重り。「二」紋の名。

ふんどん

分銅の形を畫きたるもの。(圖)

ふんどう

褌(名) 腰卷。●腰帶。

ふんとし

ぶんちん

文鎮(名) 文字を書く時紙の動かぬ爲に置く重り。

ぶんり

分辭(名) 分れ離るゝ事。●別々になる事。△(動)―分離す。

ぶんり

分量(名) 量。●多少。●輕重。

ぶんり

文略(名) 文句を省略する事。

ぶんめ

忿怒(名) ぶんごに同じ。怒る事。

ぶんが

紛紙(名) 文雅(名) 文章詩歌などの風雅の道。

ぶんが

文格(名) 文章の規則。●文法。

ぶんかく

文學(名) 「一」文章を研究する總べての學問。文章學、歌學、詩學、史學、語學、修辭學の類。「二」學問。●學術。……武術に對して。

ぶんたい

(名) 机に同じ。
文體(名) 文の體裁。●文の姿。

ぶんたい

文臺(名) 歌會の席にて懷紙短冊など載する臺。机に似て小さく足低きもの。(圖)

ぶんだん

分擔(名) 一部分を持ち分けて各擔任する事。△(動)―分擔す。



ふんだん

文壇(名) 文學社會。

ふんだんどうこ

分段同語(句) 佛の身を分けて神と現はれ。此世に來りて人間と言語を交ふるの意。(佛敎)

ふんれい

文例(名) 文句の先例。●作文の模範。

ふんつう

文通(名) 手紙の音信。

ふんらん

紛亂(名) 紛れ亂るゝ事。●混亂。●紊亂。

ふんのつかさ

△(動)―紛亂す。

ふんく。

(名) 圖書寮に同じ。(和名抄) 噴火(名) 火山などより火を噴き出す事。△

ふんく。

(動)―噴火す。

ふんぐい

文化(名) 文明開化。 分外(名) 分限以外なる事。△(形)―分外の。

ふんぐん

(副)―分外に。 文官(名) 武官に對して云ふ。軍務ならざる

ふんぐざん

事務を執る總べての官職。 噴火山(名) 火焔焔なごを噴き出す山。●

ふんや

火山。 文屋(名) 學問所。●學校。

ふんや

分野(名) 古代の曆學天文學上の詞。曆算を以て配當したる二十八宿の其各の位置。●星

ふんやわらは

の宿り。 文屋童(名) 昔し大學寮の學生。

ふんまん

(名) 圓形を畫くに用ふる具。多くは竹にて造る。 忿懣(名) 憤る事。●怒る事。△(動)―忿懣す。

ぶんけ

分家(名) 分れて別に一家を爲したる家。●別家。△(動)―分家す。

ぶんけい

文藝(名) 文學に關する技藝。●文筆。

ぶんけん

分間(名) 土地の測量。△(動)―分間す。

ぶんげん

分限(名) 身の程。●分際。 奮激(名) 事に激して心を奮ひ起す事。△

ぶんこ

(動)―奮激す。 紛紛(副) みだるゝ有様。(又)―紛々々。 文庫(名) 「一」書籍を入るゝ庫。●圖書室。「二」

ふんこつ

書類又は其他の雜品を入るゝ手箱。多くは掛子あるもの。 粉骨(名) 身を粉にして働く事。

ふんこみ

踏込(名) 甲冑の時足に踏み込み履くもの。(圖)



ぶんてい

文體(名)

ぶんたいに同じ。

ぶんてん

文典(名)

文法を載せたる書物。

ぶんさい

文才(名)

文學上の才能。

ぶんざい

分際(名)

身分。●分限。

ぶんさん

分散(名)

家族など分れ分れになる事。●破産。△(動)―分散す。

ふむき

不向(名)

向かい事。●不相應。●不適當。△(形)―不向なる。(又)―不向の。

ふんぎ

紛議(名)

紛紜のある議論。

ぶんげふ

分業(名)

手分をして業務に當たる事。

ぶんきうせん

文久錢(名)

錢の名。文久三年に初めて鑄たるもの。現今一厘五毛として通用す。

ぶんめい

文明(名)

野蠻の域を遠く離れて開け進む事。

ぶんめん

文面(名)

文書の上に顯はれたる意味。

ぶんみょう

分明(名)

明白。●判然。△(形)―分明なる。(副)―分明に。

ぶんし

分子(名)

科學上の詞。天地間の萬物を構成する微細なる物質。

ぶんじ

文事(名)

文學に關する總べての事柄。

ぶんしよ

文書(名)

〔一〕書きたる物〔二〕書籍。

ぶんしよく

文飾(名)

文章の飾。

ぶんしつ

紛失(名)

紛れ失せる事。●どこへか無くしたる事。△(動)―紛失す。

ぶんじん

分身(名)

ぶんしんに同じ。

ぶんしん

分身(名)

神佛が元一體なる身を分け種々の體になりて此世に現はるゝ事。

ぶんしん

文身(名)

身に入墨する事。

ぶんじん

文人(名)

文學文藝に従事する人。

ぶんしんぐわ

文人畫(名)

南宗畫の一名。◎文人の間に事はら行はれたる故にいふ。

ぶんしふ

文集(名)

〔一〕文章を集め載せたる書物。〔二〕白氏文集の略。

ぶんじふ

分泌(名)

生物の體肉より液汁を出たす事。●大便秘、汗などの出づる事。△(動)―分泌す。

ぶんびつ

文筆(名)

讀み書き。

ぶんせん

文錢(名)

錢の名。寛文中京都方廣寺の大佛を熔かして鑄たる錢。

ぶんせき

分析(名)

化學上の詞。其物を分ちて各原素ならしむる事。△(動)―分析す。

を附くる。○源氏「御文いさよくふんじてけり」

ふんすゐ

ふんすう

噴水(名) 水を噴き出す事。又其噴き出す水。
分數(名) 「一」數學上の詞。單位に充たざる數の稱。「二」又之を計算する法。
粉熟(名) ふすくに同じ。

ふんずく

風(名) 「一」風習。●風俗。●風儀。「二」風采。

ふう

封(名) 封する事。●封じたる所。●封じ目。

ふういん

封印(名) 封じ目に押す印。

ふうゐん

風韻(名) 風雅にしてごこさなく言外に味あ
る事。

ふうは

風波(名) 「一」風と波と。「二」人間社會の不和。

ふうはく

風伯(名) 風の神の異名。

ふうど

風土(名) 其土地の地理、氣候又は風俗。

ふうどう

封筒(名) 狀袋。

ふうどき

風土記(名) ふどきに同じ。

ふうて_テう

風潮(名) 勢につれて進む世の有様。●時勢。

ふうぢん

風塵(名) 世俗のうるさき事。●世塵。

ふうりん

風鈴(名) 軒先に釣りて風吹けば鳴る様に造りたる鈴。

ふうりゅう

風流(名) 風雅。●みやび。△(形) 風流なる。(又) 風流の。(副) 風流に。

ふうが

風雅(名) 俗氣を離れてみやびやかなる事。●風流。△(形) 風雅なる。(又) 風雅の。(副) 風雅に。

ふうたい

風帶(名) 「一」几帳の上より垂るゝ帶の如き布。「二」懸物の上より垂るゝ二筋の細長き切れ又は紙。

ふうたい

風袋(名) 物を器物に入れ秤に懸けて量る時其器物の稱。

ふうぞく

風俗(名) 「一」ならはし。●習慣。「二」古代諸國の風俗を作りたる歌曲の一種。催馬樂の種類。

ふうぞくどころ

風俗所(名) 大歌所の一名。

ふうぞくうた

風俗歌(名) 風俗の「二」に同じ。

ふうん

浮雲(名) 浮き雲。●根なし雲。

ふうん

不運(名) 運の惡しき事。●不仕合。△(形) 不運なる。(又) 不運の。

ぶうん

武運(名) 武士武道の運命。

ふうう 風雨(名) 「(一)雨と風と」(二)風吹の時の雨。

ふううけい 風雨計(名) 晴雨計に同じ。

ふうくわ 風化(名) 化學上の詞。空氣に觸れて變化する事。△(動)―風化する。

ふうけい 風景(名) 景色。●景。

ふうげつ 風月(名) 風光月色の意。◎天然の美。●天

ふうふ 夫婦(名) 夫と妻と。●風流。

ふうぶん 風聞(名) 噂。●風説。

ふうき 風采(名) 人の様子。●なりふり。●人品。

ふうぎ 富貴(名) 富み貴き事。●富有と高貴と。

ふうぎ 風儀(名) 風俗と禮儀と。

ふうきん 風琴(名) 洋風樂器の名。「(一)おるがんの譯語。(二)手風琴。

ふうみ 風味(名) 食品の味。

ふうしつ 風疾(名) 病の名。瘰癧質の類。

ふうじや 風邪(名) 病の名。引き風。

ふうし 風習(名) ならはし。●慣習。

ふうせつ 風説(名) 噂。●風聞。●風評。

ふうせん 風船(名) 水素瓦斯などの力にて空中を乗り歩くやうに作れる球形の船。●輕氣球。

ふうず 諷(他動サ變) 遠まほしに諷す。

ふうず 封(他動サ變) 「(一)物の包み目など猥に開かれぬ様に糊にて附くる。(二)神又は佛の力にて惡魔病氣などを出ぬやうにして置く。

ふうり 布海苔(名) 海藻の名。煮て一種の糊を爲し用ふるもの。

ふうろ 不能(名) 能の無き事。●無藝。

ふうろ 服(名) 「(一)衣服。●着物。(二)藥・茶・煙草など一回に飲む量。

ふうろ 腹(名) はら。

ふうろ 福(名) 「(一)さいはひ。●仕合。●幸福。(二)富

ふうろ 幅(名) 「(一)ばい。(二)懸物。●軸。

ふうろ 副(名) 「(一)副ふ事。又は副ひたる物。(二)本役に副ひて其次に附く役。●助役。●次官。

ふうろ 葺(他動四段) 屋根に覆ふ。

ふうろ 吹(自動四段) 風の過ぎ行く。

ふうろ 吹(他動四段) 「(一)風が物を撫て又は動かす。

ふうろ 「(二)息を外に出だす。●息にて物を鳴らす。

ふうろ 「(三)すべて吹くに似たる働を爲す。(四)特

ふうろ には笛を吹く。

ふうろ 噴(自動四段) 水の湧きあがる。●流動物の飛び

出す。

噴(他動四段) 噴かしむる。●湧き上らしむる。

拭(他動四段) 拭ふに同じ。

(他動四段) 振るの古言。○記「十指劍を抜きて

後手にふきつゝ逃げ來ませるな」

更(自動下二段) 「一」夜の深くなる。「二」時節の

深くなる。○「春ふけにけり」「三」歸の深く

なる。

河豚(名) 魚の名。頭小さく背は黒褐色にて腹は

白く。怒る時は腹を脹らして丸くなるもの。

味美なれどもまた其毒に中る事あり。

不具(名) 「一」物事の具足せぬ事。●不完全。「二」

かたば。●癩疾。

不喫(名) 思ひ設けぬ事。

服(名) 「一」裏服。●蓐衣。「二」裏服を着て居る

間。●裏中。「三」徳川時代の制。忌終りて

後には殺生神拜などを慎むべき期限内。…

父母には忌五十日、服十三箇月の類(四)

現今にては忌も服も同じ意に用ふ。

武具(名) 「一」武事に用ふる器具。「二」特には軍

服。

福音(名) 救主の來臨の消息。●喜びの音づ

れ。(基督教)

幅員(名) 土地などの廣さ。●幅。

福音書(名) 新約全書最初の四書の稱。基

督の傳記を載せたるところ。(基督教)

馥郁(副) 香氣高き有様。(又)一馥郁と。

袋(名) 「一」物を入るゝやうに紙切れ、革な

ごにて造りたるもの。「二」總べて袋に似た

るもの。

袋戸(名) 袋戸棚の戸。

袋戸棚(名) 床の間の懸物を懸けぬ方の

床に小さく作りたる戸棚。其下にあるなば

地袋といふ。

袋棚(名) 袋戸棚に同じ。

袋角(名) 新たに生じて未だ圓まらぬ鹿の

角。

梟(名) 鳥の名。鷲鳥類にして眼力強きに過

ぎ晝は樹上に憩ひ夜出で、寐鳥を捕へ食ふ

もの。其鳴く聲は土地によりて「ごろすけ

ばう／＼」ふるつく／＼」のりつけば

うせ」など聞きなされて物凄し。

ふくろくじ

福祿壽(名) 七福神の一つ。南極星の化身にて頭長く身短き人。●ながあたま。

ふくろもち

袋持(名) 勝負事に負くる事。

ふくろもの

袋物(名) 煙草入、又は紙入などの類の總名。

ふくへ

瓢(名) 瓢箪。

ふくぞく

復讀(名) 書物を繰返して讀む事。●復習。

ふくち

●溫習。△(動)―復讀す。

福地(名) 福田に同じ。(佛教)

ふくぢや

福茶(名) 大晦日、元日、節分などに飲む祝の茶。普通の茶に梅干、黒豆、切昆布など加へたるもの。

ふぐり

陰囊(名) 睪丸。

ふぐりペリヨウ

茯苓(名) 藥品の名。菌の一種。土中にある牡松の根に生ずるもの。

ふくりん

覆輪(名) 他の物を被せて縁を取る事。

ふくる

膨脹(自動下二段) (一)大きく外の方へ張り出す。●膨脹する。(二)立腹する。

ふぐるま

文車(名) 書棚の下に車を附けて室内を挽き歩くやうに作るもの。

ふくわい

府會(名) 府の議會。

ふくゝい

附會(名) 道理を附けて其事らしくする事。●(こ)つけ。●牽強。△(動)―附會す。

ふくゝい

不快(名) (一)心地悪しき事。●不愉快。

ふくわかし

福沸(名) 正月の供餅を入れたる粥。

ふくゝん

府官(名) (一)府の官吏。(二)特には大宰府の官吏。

ぶくゝん

武官(名) 武事を掌る官吏。

ふくわけ

福分(名) 到來品を他人に分ち贈る事。……

ふくよか

祝ひて福の字を用ふ。●福分。ふくらみたる有様。(形)―ふくよかなる。

ふぐたいてんのあた

(副)―ふくよかに。(雅) 不俱戴天之饑(名) 俱に此世に生きて同じ天を戴くまじき讎敵。●殺さでは置かれぬ君父の敵。

ふくたむ

(自動四段) 膨る。●そいけて太くなる。

ふくたむ

(他動下二段) 膨らましむる。

ふくたみ

(名) ふくだむ事。●膨れたる事。

ふくれ

膨脹(名) ふくろゝ事。●ふくれたる處。

ふくそう

輻湊(名) 車の輻の如く湊まるの意。◎群集する事。△(動)―輻湊す。

ふくさう

服裝(名) 衣服の支度。●いでたち。

ふくざう

覆藏(名) 打明けずに覆ひ藏す事。
腹痛(名) 病にて腹の痛む事。

ふくつう

(自動四段) ふくつけくする。●貪る。

●怒張る。○源氏「いと多く(雪を)まろばさんこふくつけかれども得おし動かさで」

ふくつけし

(形。形状言ク活) 貪り欲しがらる。●怒張る。

○宇治「此鉢飛んで例の物乞ひに來りけるを。例の鉢來にたり。ゆいしくふくつけき鉢よさて」

ふくなほし

服直(名) 裏服を脱ぎて平生の服に着替ふる事。(源氏)

ふくらばき

(名) 腰の後の脹れたる所。

ふくらか

ふくよかに同じ。△(形)―ふくらかなる。(副)―ふくらかに。

ふくらむ

(自動四段) 脹る。●をいけて太くなる。

ふくらむ

(他動下二段) ふくらまする。

ふくらみ

(名) ふくらむ事。

ふくらすめ

膨雀(一) ふくらかなる雀。(二)紋の名。(圖)

ふくむ

含(他動四段) 「一」口中または

心中に物を入れて出さずに居る。「二」其氣



色を帯びる。「三」含有する。

ふくむ

含(他動下二段) 含まする。

ふくうけんざう

不空羂索(名) 觀音の一體。生死の大海に妙法蓮華の餌を蒔き。心念不空の索な

以て

衆生

の魚

を釣

り上

げ苦

提彼

岸に送るといふ姿。(圖)

ふくのかみ

福神(名) 幸福を人間に與ふる神。……大

ふくくづ

黒惡比須の類。

ふくくづ

復活(名) 「一」死者靈魂の來世にて蘇生する事。(基督教) 「二」一度衰へたる事の再び

ふくくづ

盛になる事。

ふくくづ

復活日(名) 基督の復活せし記念日。

ふくくづ

すなはち陽曆三月廿一日以後の満月(十五日)に次ぐ日曜日。

ふくやく

服藥(名) 藥を服する事。△(動)―服藥す。



ふくふくし

(名) 肺の臓。(和名抄)

ふくふくし

福々し(形。形狀言シケ活) 肉肥えてこ

ふくふくし

やかに福ありげなる有様。

ふくこ

復古(名) 古に復る事。●恢復。△(動)―復古す。

ふくか

腹稿(名) 詩文など腹中にて作りたる草稿。

ふくか

服穢(名) 忌服の穢れ。

ふくか

服役(名) 兵役、懲役等すべて役に服する事。

ふくか

△(動)―服役す。

ふくか

覆轡(名) 前車の覆りたる痕跡の意。◎總べて他人の失敗したる跡。

ふくか

福田(名) 幸福の收穫を得べき田地。●善根。

ふくか

●善因。(佛教)

ふくか

帛紗。服紗(名) 「一」風呂敷に似て小さく絹にて作れるもの。「二」茶の湯の具。茶器の塵

ふくか

を拂ふ小さき絹。

ふくか

服罪(名) 罪に服する事。△(動)―服罪す。

ふくか

服忌(名) 「一」服々忌々。「二」忌に同じ。

ふくか

服忌令(名) 徳川幕府にて出来たる服忌の制。

ふくか

復命(名) 使命を終はりて其旨を言上する事。△(動)―復命す。

ふくか

覆面(名) 面を覆ひ隠す事。又は其物。

ふくか

副使(名) 使者の副へ役。

ふくか

副詞(名) 語學上の詞。動詞、形容詞または他の副詞を形容するに用ふるもの。……「雨いたく降る」「水清く流る」「風いさよく入る」の類。

ふくか

(名) 農具の名。野菜などを堀るもの。鉈の類。

ふくめい

復職(名) 元の官職に復する事。△(動)―復職す。

ふくめい

復飾(名) 出家などの還俗する事。△(動)―復飾す。

ふくめい

腹色(名) 衣服の色。

ふくめい

腹心(名) 腹心を打明かすほど極めて親密なる人。

ふくめい

福人(名) 幸福なる人。●仕合者。

ふくめい

福壽(名) 福と壽と。●幸福。●福德。

ふくめい

復讎(名) 讎を復する事。●敵討。△(動)―復讎す。

ふくめい

福壽草(名) 草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

ふくめい

草の名。新年早々黄金色の

花咲くもの。

ふくしもの

(名) 着に同じ。(和名抄)

ふくびき

福引(名) 遊戯の名。新年などに種々の趣向

をなし品物を福引にして分つ事。

ふくせき

復籍(名) 元の籍に復する事。△(動)―復籍

す。

ふくす

伏(自動サ變)

風伏する。●從ふ。

ふくす

服(自動サ變)

心より從ふ。●歸服する。

ふくす

服(他動サ變)

〔一〕服従さする。〔二〕藥を飲む

ふくす

復(自動サ變)

恢復する。●元の様になる。

ふくす

復(他動サ變)

〔一〕元の様にする。●取り返す。

〔二〕復讀する。

ふくす

服(他動サ變)

飲む。●食ふ。

ふくす

複數(名)

二つ以上の數。……一を單數とい

ふに對して。

ふくすけ

福助(名)

福徳圓滿なる相好と理想せられた

る人形。頭は非常に大きく額出で笑顔よく

丈低くして上下を着するもの。

ふや

文屋(名)

ふみやの略。◎學問所。●學校。●大

學。

ふやく

(自動下二段)

水分に遭ひて量の大きくなる。

ぶやく

●はさびる。

ぶやす

夫役(名) 人夫。●人足。

ぶまん

殖(他動四段) 殖えさする。●増す。

ぶまん

不満足(名) 不満足。●不平。

ぶまんぞく

不満足(名) 心に満足せぬ事。

ぶまふ

(他動下二段) 踏むの延音。◎蹈みて抑へ

ぶまき

文卷(名) 帙。

ぶけ

雲脂(名) 脫離したる皮膚の細片。頭髮の中に溜

まるもの。

ぶけ

武家(名) 〔一〕武人の家。……公家に對して。〔二〕

武士。……農商に對して。

ぶけい

父兄(名) 父と兄と。

ぶけい

不敬(名) 敬禮を缺く事。●無禮。

ぶけい

武藝(名) 武道の藝術。●武技。●武術。

ぶけい

深野(名) 草深き野。(萬葉)

ぶける

耽(自動四段) 其事に深く心を傾くる。

ぶけた

深田(名) 泥深き田。

ぶけつ

不潔(名) 清潔ならぬ事。△(形)―不潔なる。

(又)―不潔の。(副)―不潔に。

ぶけつ

風月(名) ふうげつに同じ。

ふづつのも

風月の友(名) 風流の友。●雅友。

ふげん

普賢(名) 菩薩の名。徳利普く仁慈賢くして常に白象に乗りたるところの姿を畫ぐくもの。

ふげん

分限(名) 「一」身代。●身分。「二」富有。

ふげんざう

普賢象(名) 「一」普賢菩薩の乗る白象。「二」櫻の一種。花の莖長きもの。◎鼻長しの意に掛けたる名。

ふけしう

普化宗(名) 禪宗の一派。伏見天皇の頃僧覺心の弘めたるもの。唐僧普化禪師の開きしところ。後世虚無僧とて尺八を吹き念佛するものは皆此宗門に屬す。

ふふむ

(他動四段) 「一」含む。「二」呑む。

ふぶん

不文(名) 文章の作れぬ事。●文章の下手なる事。

ぶぶん

部分(名) 物事の一端。●一部。

ふふく

不服(名) 服従せぬ事。●不得心。

ふぶく

(自動四段) 「一」吹雪のする。「二」風の雨を吹き散らす。

ふふまる

(自動四段) 含まる。||ふくむに同じ。

ふふき

蔭(名) 草の名。ふきの古言。(和名抄)

ふぶき

吹雪(名) 風交りに降る雪。●積りたる雪の風に吹かれて散る事。

ふこ

封戸(名) 中古位階に依り官職に依りて皇族諸臣に賜はりたる民戸。其民戸より出だす租税を二分して一半は朝廷に納め他の一半を其封主が得るの制なり。皇族は位階の有無に拘はらず(無品まで)。臣下は位階にて三位以上。官職にて參議以上に賜はるもの。

ふこ

春(名) 繩の紐を附けたる竹の籠。農夫の物を入れて運ぶ用具。○拾玉集「早蕨のなりにしなれば賤の女がふこ手にかくる野邊の夕ぐれ」(圖)



ぶこ

武庫(名) 武器を納め置く庫。

ぶこつ

無骨(名) 無風流。●無作法。

ふこつそ

腐骨疽(名) 病の名。骨の腐るもの。

ふかう

不孝(名) 父母に孝ならぬ事。△(形)―不孝の。

ふかう

不幸(名) 「一」不仕合。●不運。△(形)―不幸の。(副)―不幸に。「二」其家に死人のありたる事。

ふがふ

符合(名) 割符を合はせたる如く正しく合ふ

事。△(動)―符合す。

ふがう

符號(名)

合印。●心覺にする印。

ふがう

(名)

不學の音便。(大鏡)

ふこく

布告(名)

政府より一般人民に向ひての達し。

ふこく

誣告(名)

●布達。●お觸れ。△(動)―布告す。

ふこく

誣告(名)

法律上の詞。無實の告訴。

ふえ

笛(名)

樂器の名。「一」竹にて作り吹き鳴らすもの。總名。●吹物。○「笙の笛」「篳篥の笛」

ふえ

「尺八の笛」「二」横笛。「三」のぶえの略。

ふえ

「四」魚類の腹中にある浮き袋。

ふえい

武衛(名)

兵衛府の異名。

ふえい

笛柱(名)

能舞臺にて笛の役の人の座し居るまごころの柱。向うて右の奥の方にあり。

ふえい

不縁(名)

離縁。

ふえん

布衍。敷衍(名)

布き延ばす事。●廣ぐる事。△

ふえん

(動)―布衍す。

ふえん

無體(名)

まだ飄氣のなき事。◎生の魚。

ふえん

笛吹(名)

「一」笛を吹く人。「二」笛を上手に吹く人。

ふえん

不得手(名)

不得意。●下手。

ふえん

筆(名)

「一」字又は畫をかく道具。多くは竹を柄とす。

ふえん

筆(名)

「一」字又は畫をかく道具。多くは竹を柄とす。

ふえん

筆(名)

「一」字又は畫をかく道具。多くは竹を柄とす。

ふでがしら

筆頭(名)

し毛を以て穂先とす。「二」其かきたる字、又は

ふでたて

は畫。

姓名を連れ記す時に最初に記す事。●ひっさう。

ふでつか

筆立(名)

筆を立て置く筒。

ふでつか

筆柄(名)

筆の柄。●筆の軸。

ふでつか

筆塚(名)

用ひ古したる筆を埋め置く塚。

ふでつか

筆遣(名)

筆の遣ひ方。●筆法。●運筆。

ふでつか

筆跡(名)

書きたる書畫の跡。●ひっせき。

ふでつか

筆尻(名)

筆柄の端。

ふでつか

筆洗(名)

筆を洗ふ水。又は之を盛る器。

ふでつか

不敵(名)

「一」敵し難く強き事。「二」わるつよき事。●不届。●不埒。

ふでき

不出來(名)

出來のわるき事。●拙作。

ふでき

筆結(名)

筆を造る工人。

ふでき

歩合(名)

金子など全額の幾分さいふ割合。

ふでき

不安内(名)

其物事をよく知らぬ事。

ふでき

不安心(名)

安心の出來ぬ事。●懸念。

ふでき

武惡(名)

狂言の面の名。恐ろしく惡鬼のやう

ふでき

筆洗(名)

筆を洗ふ水。又は之を盛る器。

ふでき

不敵(名)

「一」敵し難く強き事。「二」わるつよき事。●不届。●不埒。

なる形したるもの。

ふろ

房。總(名)。「一」麻の古名。「二」絲を集めて一端

を束ね一端を散らしたるもの。紐などの飾として用ふ。「三」總べて房に似たるもの。

ふろく

負債(名) 借金。●おひめ。

ふろく

文才(名) 作文の才。●文才(空穂)

ふろく

不在(名) 家に居らぬ事。●留守。

ふろく

(副) 多く。●あまた。●澤山。○空穂「女御

まかなひの唯のもふさにさぶらひ給ふ」△(形)―ふさなる。

ふさぬ

(他動下二段) 總の様に括る。●統轄する。●

總括する。○續紀宣命「汝大臣の萬の政ふされもちて」

ふさぬ

(自動四段) 寝る。●伏す。●横になる。●う

つぶしになる。

ふさはし

(形。形狀言シク活) ふさふ有様。●適合す

る。●相應する。

ふさがる

塞(自動四段) 蓋さなる。●他の物をもて満

たされて居る。●通路の妨げらる。

ふさやうじ

房楊枝(名) 先を房のやうに作りたる齒楊枝。

ぶさた

無沙汰(名) 久しく音信の絶ゆる事。●無音。

●疎濶。

ぶさふり

(自動四段) 適合する。●相當する。●よく釣り合ふ。

ぶさく

不作(名) 作物の不出來なる事。●凶年。●凶作。

ぶさぐ

塞(他動四段) ふさがらしむる。●閉づる。●遮る。●邪覽する。

ぶさやか

髪などの總の如く澤山ある有様。(形)―ふさやかなる。(副)―ふさやかに。

ぶさぶさ

(副) 房の如く集まり垂るゝ有様。●ふさやかに。(又)―ふさくゝと。

ぶさ

路(名) 野菜の名。莖を食用とするもの。

ぶさ

不軌(名) 道ならぬ企。●謀反。

ぶさ

(名) 袴、綿入などの衣服の裾に裏地を返して縁としたる處。

ぶさ

不義(名) 「一」義に反く事。△(形)不義なる。(又)不義の。(副)―不義に。「二」密通。

ぶさ

武器(名) 軍用器械の總名。刀、劍、鎗、長刀、鐵砲の類。●兵器。

ぶさ

(名) 舞妓(名) 歌舞を業とする女。●舞姫。●

舞子。

ふきいた

葺板(名) 屋根に葺きたる板。

ふきはる

吹晴(自動下二段) 風に吹かれて雲霧などの

晴る。(歌詞)

ふきぬき

吹貫(名) (一)下

を切り垂らした

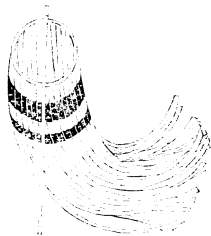
る布を輪に付け

て竿に掲げたる

もの。(圖)(二)

風通しのよき

所。



ふきはば

吹皮(名) 鞆ふたがわの古名。(和名抄)

ふきがたり

(名) 自慢話。●ほら。(枕)

ふきかへし

吹返(名) 兜の名所。廂ひだりの兩方に耳の如く

附きたるもの。

ふきよう

不興(名) (一)面白からぬ事。●不愉快。(二)

目上の人の機嫌を損する事。●御不機嫌。

ふけきよう

不孝(名) ふけうに同じ。(雅)

ふきよう

不器用(名) 器用ならぬ事。●不手際。△(形)

―不器用なる(副)―不器用に。

ふきよう

奉行(名) (一)命令を奉じて行ふ事。●公

ぶきぐ

舞曲(名) 歌舞又は音楽に合はする舞。

ぶきぐ

舞曲(名) ふきよくに同じ。

ふきだけ

吹竹(名) 火吹竹に同じ。

ふきたす

吹出(自動四段) 可笑しさに堪へずして覺は

す聲を立つる。(俗)

ふきそく

不規則(名) (一)規則の正しからぬ事。(二)

物事に不順序なる事。●不揃なる事。△(形)

(形)―不規則なる(又)―不規則の(副)―

不規則に。

ふきつ

不吉(名) めてたからぬ事。●不祝儀。△(形)

不吉なる。(又)―不吉の。(副)―不吉に。

ふきながし

吹流(名) 吹貫に同じ。

ふきん

布巾(名) 食器などを拭ふ布切。

ふきや

吹矢(名) 木又は竹の筒に矢を入れ口に吹きて

小鳥などを射る具。

ふききよう

不朽(名) 後の世までも朽ちぬ事。△(形)―

不朽の。(副)―不朽に。

ふきし

吹敷(自動又他動四段) 一面に吹き渡る。●

吹きて物を一面に敷き渡す。○後撰「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきさめぬ玉ぞ散りける」玉葉「鐘の音を松に吹き敷く追風に妻木と重き歸る山人」

ふゆ

冬(名)

四季の第四。太陰曆にては十月より十二月まで。太陽曆にては十一、十二、一の三ヶ月。

ふゆ

殖(自動下二段)

数の多くなる。●増す。

ふゆかは

冬川(名)

冬季の川。

ふゆがれ

冬枯(名)

冬になりて草木の枯るゝ事。又は

其季節。

ふい

蟬蛸(名)

虫の名。朝に生れ夕に死すといふは

かなきもの。

ふい

富有(名)

富みてゆたかなる事。△(形)―富有

なる。(副)―富有に。

ふい

浮遊(名)

浮びあるく事。△(動)―浮遊す。

ふゆう

武勇(名)

武く勇ましき事。

ふゆげ

冬毛(名)

鳥獸などに冬生する毛。

ふゆごもり

冬籠(名)

冬こもる事。○金葉「雪の色を奪ひて咲ける卯の花に小野の里人冬こもり

ふゆごもり

すな

冬籠(枕詞) 春の枕詞。冬の氣がこもり隠れて春が来りたる時顯はるゝこの意味にて續けたり

ふゆごもり

冬籠(自動四段)

「一」冬の寒き間家に籠り居る。「二」冬の寒き間木草の芽の内に籠りて外に出て來ぬ。

ふゆき

冬木(名)

冬枯の木。

ふゆぎ

冬着(名)

冬着る衣服。

ふゆぎ

不行屈(名)

行きさつかざる事。●氣の

ふゆぎ

きかぬ事。

ふめいよ

不名譽(名)

名譽を失ふ事。●耻辱。

ふめんぼく

不面目(名)

面目を失ふ事。●恥辱。

ふめく

(自動四段)

ぶん／＼聲を立つる。○宇治「蛇一つふめきて顔のめぐりにあるを」

ふみ

文。書(名)

「一」書附。●文書。「二」書物。●本。

ふみいし

「三」手紙。「四」詩。(源氏)

ふみいし

踏石(名)

家の上がり口に据ゑたる石。履物を脱ぎ置く處。

ふみいし

文箱(名)

「一」書物を入るゝ箱。「二」狀箱。●

ふみいし

ふばい。

ふみいし

ふばい。

ふみいし

ふばい。

ふみはさみ

文挾(名) 貴人に奉る書面を

挾みて捧げ持つ爲めの木。

(圖)

ふみはじめ

文初(名) 小兒の書物を讀み、

初むる事。又は其祝。●讀初め。

ふみにじる

蹈蹂(他動四段) 蹈みつけて押しつぶす。

●蹂躪する。

ふみどの

文殿(名) ふどのに同じ。

ふみぬき

蹈抜(名) 釘など蹈み付けて足を傷つくる

事。

ふみがき

文書(名) 手紙を書く事。●手紙の書き振り。

ふみた

文板(名) 札の古名。(和名抄)

ふみだい

蹈臺(名) 高き所の物を取りなどする時足に

て蹈まゆる臺。●蹈繼。

ふみたん

蹈段(名) 階子の蹈板。

ふみつぎ

蹈繼(名) 蹈臺に同じ。

ふみつぎ

文月(名) 七月の古名。

ふみん

府民(名) 府下の人民。

ふみうす

蹈臼(名) 杵を足にて蹈みて搗く臼。

ふみのつかさ

書司(名) 禁中にて御物の書籍、文房具、

樂器を掌る役所。官吏は女官にて尙書、典



ふみのつかさ

(名) 圖書寮に同じ。(和名抄)

ふみや

文屋(名) 〔一〕學問所。●ふんや。〔二〕書物を

賣る家。●本屋。●書肆。●書林。

ふみま

蹈縋(名) 徳川時代。切支丹宗信徒の有無を調

査する爲め毎年正月長崎奉行所に於て耶穌の像を鑄たる銅像を人民に蹈ます事。

ふみで

文手(名) 筆の古名。

ふみき

蹈木(名) 機の具。左右の足にて蹈まへ縦糸を

上げ下げする木。

ふみきり

蹈切(名) 鐵道線路と普通の道路と交叉する

所。

ふみしたく

(他動四段) 蹈み付くる。

ふし

節(名) 〔一〕竹葦の類にては幹の中の隔て。●樹

木にては枝の差し出づる處。●動物にては骨のつがひ目。●織物にては糸の繋ぎ目。

〔二〕すべて是等の節に似たるもの。〔三〕文章にては斷落中の小切り。〔四〕詩歌音樂にては歌ふ調子の上がり下がりのあや。〔五〕

事。●時。●場合。●點。○源氏「な」が

ましくも又よきふしなりとも思ひ給ふる

に

柴(名) しばに同じ。(雅)

ふし 五倍子(名) 白膠木の木に生ずる虫の巢。粉にし

て鐵漿てつじょうの中に和し用ふるもの。

ふじ 不時(名) 定まりたる時ならぬ事。●臨時。△(形)

―不時の。(副)―不時に。

ぶし 武士(名) 武事を以て世に立つ人。●さむらひ。●

もののふ。●武家。●武者。●軍人。

ぶじ 無事(名) 「一」爲すべき業のなき事。●ひま。「二」

泰平。●平和。●安全。●健康。△(形)―

無事の。(副)―無事に。

ふしじょう 節絲(名) 「一」絹絲の一種。節の多きもの。

「二」節糸織の略。

ふしじょうり 節糸織(名) 節糸にて織りたる絹織物。

ふじくう 不自由(名) 自由のきかぬ事。

ふしはかせ 節博士(名) 音楽の節附。●譜。

ふしはず 節筈(名) 矢筈の一種。竹の節にて造りたる

もの。

ふしど 臥所(名) 「一」寐る所。「二」臥すべき床。

ふしおり 節織(名) 節糸織に同じ。

ふしおき 臥起(名) おきふしに同じ。(蜻蛉)

ふしがき 柴垣(名) 柴の垣。(古)

ふしやう 見鐘(名) 「一」鐘の異名。「二」雅樂調子の名。

十二律の一つ。

ふしやシヨウ 府生(名) 「一」六衛府の官吏。供奉又は記

録等の事を掌る役。「二」檢非違使の官吏。

記録の役。

ふしやシヨウ 負傷(名) 手傷を負ふ事。●手負。●怪我。

△(動)―負傷す。

ふせシヨウ 不肖(名) 父母などに肖ぬの意にて自身を謙

遜していふ詞。

ふしやシヨウ 不祥(名) 忌むべき事。●不吉。

ふじやシヨウ 不淨(名) 「一」清淨ならぬ事。●穢れ。「二」

月經。

ふしやシヨウ 武將(名) 軍に將たる人。

ふしやシヨウ 不精(名) おこたり。●なまけ。△(形)―

不精なる。(又)―不精の。(副)―不精に。

ふしやシヨウらぐ 武昌樂(名) 雅樂の曲名。

ふしやうふしやう 不承不承(副) 不承知なから。

ふじやく 侮辱(名) 侮り辱むる事。●輕蔑。△(動)侮辱

ふしだつ 節立(自動四段) 「一」節の多くある。「二」の

びたつ。……(雅)

ふしぞめ

● 染料(名) 染色の名。くろもじの木の汁にて

染めたるもの。

ふじつ

不實(名) 不親切。● 不人情。

ふじつ

不日(副) 日ならず。● 近日。

ふしづく

柴漬(自動下二段) 柴漬をする。○ 夫木「冬

深み六田の淀にふしつけしまほまの水に鷺
鷺ぞ鳴くなる」

ふしづけ

柴漬(名) 柴を水中に漬け置き此に魚を集ま

らしめて捕る一種の漁法。

ふしなほめ

伏縄目(名) 染革の名。紺、藍、白の三色を

並べて縄を重ね伏せたる如き形に染めたる
もの。常に鍔の織に用ふ。

ふしん

普請(名) 作事。● 建築。

ふしん

不審(名) 「一」いぶかしき事。● 疑惑。「二」不

審を問ふ事。● 疑問。「三」勘當。● 勘氣。

ふじん

婦人(名) 女。

ふじん

夫人(名) 貴人の妻の尊稱。

ふじん

不仁(名) 仁心のなき事。● 無慈悲。

ふじん

武人(名) 武を以て世に立つ人。● 武士。● 軍

人。

ぶじん

武神(名) 武道を守る神。

ふしんがみ

不審紙(名) 讀書して不審なる所に張り置

く紅唐紙。

ぶし

奉射(名) 神前にて射禮を爲し神に奉納する事。

ぶし

歩射(名) 徒歩にて弓射る事。……騎射に對して

云ふ。

ふしやなぎ

伏柳(名) 伏したる柳。○ 拾玉集「ながむ

れば立田川原のふし柳なれど老木の春ぞか

なしき」

ふしやく

不死藥(名) 死なぬ藥。(空種)

ふしまち

臥待(名) 「一」臥して待つ事。「二」臥待の月

に同じ。

ふしまちのつき

臥待月(名) 太陰曆十九日の夜の月。

ふしまつ

不始末(名) しだらもなき事。● 不體裁。

ふしぶし

節々(名) 「一」ところ／＼。● 條々。「二」時

々。● 折々。○ 源氏「故ある事のふし／＼に

は先づまうのほらせ給ふ」

ふしき

臥木(名) 臥したる木。● 倒れたる木。

ふしぎ

節木(名) 「一」節の多き木。「二」節の大きく洞

になりたる木。

ふしぎ

不思議(名) 思ひ議るべからざる事。● 奇妙。●

希代。●異變。△(形)―不思議なる。(又)

―不思議の。(副)―不思議に。

ふしゆ

不輸(名) 貢物を納めざる事。

ふじゆ

諷誦。諷頌(名) 伽陀に同じ。

ふしゆかん

佛手柑(名) 木の名。柑類にして香氣高く人の手に似たる形の實を結ぶもの。

ぶじゆつ

武術(名) 武道の藝術。●武藝。●武技。●武事。

ふじゅん

不順(名) 氣候の定まらぬ事。△(形)―不順の。(副)不順に。

ふじゆふせ

不受不施(名) 後陽成天皇の御宇備前僧日

ふしゆび

不首尾(名) 首尾のあしき事。

ふしめ

伏目(名) 目を下に使ふ事。●うつむく事。……

ふしみたり

(名) 多く涙を帶ぶる時などに云ふ。(雅)

ふししば

(名) 古代笙の名。

ふししづむ

○夫木「きりす鳴く狩場の雪に假寐せんうたのふし柴しばし宿かせ」

ふじびたひ

伏洗(名) 泣き入る。(雅)

ふじびたひ

富士額(名) 富士の山の形に似たる額を生

え際。

ぶび

武備(名) 戦争の準備。

ふびど

史(名) 「一」姓の一つ。「二」記録を掌る役。

ふへいろう

譜表(名) 音楽上の詞。五線の上に音符を排記したるもの。

ふへいろう

浮標(名) 海上に浮べたる目標。暗礁などに知らするもの。

ふびやう

風病(名) 風邪。●引風。(源氏)

ふびん

不便(名) 「一」不都合。●困却。△(形)―不便なる。●源氏「鎌を置きまごぼしていさ不便なるわざなりや」(又)―不便の。「二」憐れむべき事。●かわいそう。●氣の毒。△(形)―不便なる。(又)―不便の(副)―不便に。

ふびん

不敏(名) 敏捷ならぬの意にて自身を謙りていふ詞。

ふびん

父母(名) ふぼに同じ。○謡曲「ぶもの寵愛」

ふもど

麓(名) 山の根。●山の裾。

ふもだし

(名) 馬を繋ぐ繩。●絆に同じ。

ふもん

武門(名) 武人の家柄。●武家。

ふもん

不問(名) 問はざる事。●問題外。

ふもん

不問(名) 問はざる事。●問題外。

ぶもん

部門(名) 幾部にも分ちたる物事の其一つ。

ふもんぼん

尊門品(名) 法華經の部門の名。(佛教)

ふまう

不毛(名) 地味悪しくして草木の生長せぬ事。

ふせ

布施(名) 僧に施す物品又は金錢。

ふせい

風情(名) 趣味。●様子。●げしき。

ふせい

無勢(名) 軍勢の少なき事。●不人数。

ふせいほ

伏庵(名) 伏屋に同じ。

ふせめひ

伏縫(名) 縫目の見えぬやうに縫ふ事。

ふせる

(自動四段) 臥す。●臥して居る。○伊勢「月の

かたむくまでふせりて」

ふせがね

伏金(名) 叩き鉦の一名。

ふせつ

浮説(名) 取り留めもなき風説。

ふせつ

符節(名) 割符に同じ。

ふせつ

布設(名) 布き設くる事。△(動) 布設。

ふせん

附箋(名) 下げ札。●附け紙。

ふせんりよう

浮線綾(名)

「一」織物の名。

浮織にしたる

綾。「二」模様

名。浮線綾に織り出だしたる綾の形を寫せるもの。(圖一、二)



ふせぐ

防。禦(他動四段) 他を拒み我を守る。

ふせぐみ

伏組(名) 糸の組目の見えぬやうに組む事。

ふせや

伏屋(名) 伏したる如く低き小家。●賤が屋。

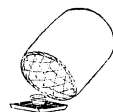
ふせご

伏籠(名) 香を衣に移す時。火取

(香爐)の上に置きて其上に衣

類を被せ。中より香を焚くた

めの籠。(圖)



ふせごせうし

伏籠少將(名) 古代物語の

名。但し世に傳はらず。(狹衣)

ふせぎ

防(名) 防ぐ事。●防禦。

ふせせい

伏勢(名) 隠れて敵を待ち居る軍勢。●伏兵。

ふす

補(他動サ變) 職に任する。

ふす

伏。臥(他動下二段) 「一」横たふる。●寐さす。●

倒す。●うつむくる。「二」下に隠す。

ふす

伏。臥(自動四段) 「一」横たはる。●寐る。●倒る

い。●うつむく。「二」下に隠るい。

ふす

賦(他動サ變) 「一」作る。「二」割り付くる。

ふす

附(他動サ變) 附くる。●附かしむる。●交附す

る。●附托する。

ふす

諷誦。諷誦(名) ふじゆに同じ。

ふす

附子(名) うつの詛り。◎毒藥の名。草烏頭さい

ふ草より取るもの。

ふすの

臥猪(名) 臥したる猪。

ふすぼる

煙(自動四段) 物の十分燃えすして煙のみ出づる。●いぶる。●煙る。

ふすべ

(名) 瘤の古名。(和名抄)

ふすべかはり

爐革(名) 茶色の革。蹴鞠の鞆したとづなどに用ふる時の稱。

ふすく

粉熟(名) 古代草子あまつちの名。五穀を五色にかたざりて粉になし。ゆでい甘葛あまづちを捏ねれ合はせ細き竹の筒の中に押し入れて突き出だしたるもの。

ぶすや

附于矢(名) 毒木矢に同じ。

ぶすま

衾(名) 寐る時身に掛くる蒲團。

ぶすま

襖(名) 障子の一種。兩面より張り塞ぎて室の隔て又は押入の戸などに立つるもの。●かみ。

ぶすまのせんじ

衾宣旨(名) 罪人を召捕れとの宣旨。

◎衾は身を被ふもの故天の網が掛かるなどの意味より起れる稱にや。

ぶすまぢな

衾道(枕) 引くに掛かる枕詞。○萬葉衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生

ふすぶ

けることもなし

煙(他動下二段) 「二」いぶらせる。●煙たがらせる。●くすべる。「二」吝氣する。●焼餅やく。

ふすもん

諷誦文(名) 諷誦の文句。(千載)

